

編集委員長退任のごあいさつ

2004年に立命館大学人間科学研究所長を拝命して以来、2010年度まで7年間という長きにわたり「立命館人間科学研究」の編集委員長を勤めさせていただきました。退任のごあいさつというのも前例がありませんが、この間、執筆者の皆様、編集業務にたずさわっていただいた歴代の編集委員、そして各号の刊行実務に多大なご協力をいただいたリサーチオフィスのスタッフの方々に、心よりの感謝の念をこの場を借りて表明させていただきます。

当誌は、人間に関わる研究や実践について、ひろく学内の教職員や院生・学生からなる研究者が執筆投稿する「紀要」という範疇に入る雑誌です。「紀要」というと、学術誌としては一般の学会誌に較べて一段レベルの低い刊行物と評価されがちです。しかし世界には、絶えず注目され続けているような著名な大学紀要もあります。7年前、編集委員長を拝命した際には、実は密かに目標とする（具体名は書けません）海外の大学紀要があり、少しでもそれに近づけたらという野心を抱いておりました。

この間、分野を越えた書式の統一、それにとまなう執筆マニュアルの制作（2006年12号に掲載）、そして学外の査読者の依頼と有償化、アクションエディターシステムなど、紀要の持つサーキュレーションの速さとコンテンツの質の向上との両立をはかるべく、編集委員会のみなさんをはじめ、研究所の全スタッフで工夫を重ねてきました。

当初は、年に2号定期刊行をするには、原稿が不足していたり編集業務に時間を要したりで等間隔の発刊がままならない年度もありました。現在では、おかげさまで、ほぼ一律のペースで刊行できるようになりました。また査読についても、外部査読者への依頼ということにも伴い、多い場合には3回、査読とリライトを繰り返すという、厳正かつ執筆者との濃密な協同作業が実現するに至っています。このことについては、査読者と執筆者には大変ご苦勞かけています。また、そうしたコミュニケーションの仲介の実務を一手に担っているリサーチオフィスのみなさんにも高度なスキル発揮と大変な労力を担っていただいています。しかしその結果、当誌は「出せば載る紀要」ではなく、リジェクトもありの「査読つき学術誌」と引用文献に記載されても恥ずかしくないものとなりました。

新編集委員長となった松田亮三先生そしてスタッフの新しい展望の下、「立命館人間科学研究」がさらに発展することを信じてやみません。当方、今度は投稿者としてお世話になります（ちなみに最近、私が連名の論文がリジェクトになりましたがまた挑戦します）。

2011年3月31日

望月 昭